

精靈地界物語
3

登場人物 紹介

ヴィルヘルミナ▲

精霊神教会の聖女。
ステファンと付き合っ
ていたという噂がある。

▲アカ

▲クロ

勇者ステファンのために生まれた精霊。
見た目は幼い頃のエリーゼにそっくり。

▲タイターリス

アールジス王国の第一
王子。凄腕の冒険者
でもある。エリーゼと
同じく「バッドステータス精霊の呪い」に
苦しめられている。

▲シーザ

後宮でエリーゼに仕える侍女。
商人の娘。いつも流利として
いて、物怖じしない性格。

▲アーディエニス▲

アールジス王国の第二王子。
恐ろしいほどの美貌の持ち主。

ステファン▶

エリーゼの次兄で、
美貌の持ち主。
伝説の勇者である
母アイリスの跡継ぎに
選ばれたが、そのことを
重荷に感じている。

リール▲

エリーゼの弟で、天才魔法使い。
毒舌だが姉思いの少年。
魔族である疑いがかかっている。

エリーゼ▲

異世界に転生した元・女子高生。
冒険者で、第一王子の妃候補
でもある。転生時に授かった
バッドステータス「精霊の呪い」を解くために
奮闘している。

目次

第一章	魔宮の者	7
第二章	ヴェンナ迷宮	108
第三章	美貌に弱い	189
第四章	襲撃者	228
第五章	理 <small>ことわり</small> からの逸脱	268

第一章 魔宮の者

ハイワーズ準男爵家の次男ステファンが勇者に選ばれたという朗報は、あつという間に国中に広がった。勇者はこの世界から魔物を減らすため、己の力を試すため、あるいは強くなるために、迷宮探索をするはずだと人々は考えた。

この国——アールジス王国には三つの迷宮がある。王都アーハザンタスにある王都迷宮、迷宮都市ヴェンナのヴェンナ迷宮、そして港湾都市ヘリエステルの近郊にある海岸迷宮。それらの周辺の街は、勇者の訪れを期待して、いつもより賑わっている。

王の祖先が人々を引き連れ、魔物が跋扈する土地を平らげて国を興した——その史実から、アールジス王国では武が尊ばれている。そんな国で生まれた勇者ともなれば、きっと強靱な肉体と精神を持つ青年なのだろうと、誰もが想像した。

しかし勇者に選ばれたステファンは今、アーハザンタスにある自宅の玄関ホールで妹に笑われていた。

「ひやはははははははは！」

「エリーゼええええ！」

ステファンは羞恥のあまり頬を染めて叫びながら、笑い転げる妹のエリーゼに近づいた。何があったのかといえは――

騎士である長男のエイブリーが、勇者となった弟ステファンに剣の稽古をつけていたのだ。これまで剣など握ったこともないステファンの稽古ぶりは無様なもので、彼が振り被った模擬刀は手からすっぽ抜けた。そして階段の手すりに当たって跳ね返り、ステファンの額に直撃したのだ。その様を目撃したエリーゼは、文字通り笑い転げた。

ステファンは顔を真っ赤にしたまま、彼女に向かって拳を振り上げる。

エリーゼは笑いながら逃げようとしたが、両足にしがみつくと幼女の姿をした精霊たちのせいで、動けない。ステファンはそれを見て、びたりと動きを止めた。

「どうしたの？ ステファン」

赤髪の幼女がきよんとする。その相貌はエリーゼのそれと酷似していた。

もう一人、黒髪の幼女もまた、幼い頃のエリーゼにそっくりだ。

「殴らないの？ ステファン」

「……お前たち」

がっくりと肩を落としたステファンを見て、二人はエリーゼの足を放した。そしてステファンの周りをぐるぐる回って、彼の顔を心配そうに覗き込む。勇者のために生まれた精霊たちに気遣われ、ステファンは苦笑を浮かべた。

「お前たちは、僕が妹のバカげた行動にいちいちカッとなるのを、やめさせようとしてくれてるん

だよな？」

「え？ えっと」

小首を傾げる幼女たちにもわかるように、ステファンは噛みくだいて言い直す。

「僕の方がエリーゼより身体がでかくて力も強いのに、お前たちに押さえつけさせて殴るなんて、卑怯だもんな。だから敢えてひどいことをしてみせて、僕を正気づかせてくれたんだろう？」

「あ、うん……そうなのかな？」

「そう、なんじゃない？ ……そうなの？」

二人の精霊――アカとクロは、お互いに顔を見合わせて首を捻る。

「ありがとうな」

ステファンはそんな二人の頭を、ぐりぐりと撫でた。ぱつと花が咲くように笑う幼女たちを見て顔を綻ばせると、ステファンは今度はエリーゼを見た。精霊たちに似たその顔をじつと眺めてから、深い溜息を吐く。

「……顔だけはそっくりなのにな」

「なんでだろう。殴られるより傷つく」

エリーゼが素直で可愛らしい妹でいられなかったのは、彼女をこれまでずっと虐げてきたステファンにも責任があるだろうに。エリーゼはそう思ったが、ステファンは彼女を指差して、精霊たちにいけしゃあしゃあとこんなことを言う。

「お前たちは、まっすぐに育てよ。あれみたいになるな。卑怯な真似やひどいことをすると、ああ

なるぞ」

それを聞いて、エリーゼは憤慨する。

「私をダシにして精霊を教育するの、やめてくれない!？」

「おい、ステファン」

黙って見ていたエイブリーがうんざりした様子で、エリーゼたちの会話に割って入った。

「元々、俺は初心者への指導に向いていないんだ。お前は俺の訓練を受ける段階に達していない。まずは憲兵隊が催している素人向けの訓練や、個人が営んでいる道場で学んだ方がいい。今のままで騎士学校に入学することすらできないぞ。剣の握り方から教えてもらえ」

「……僕が勇者だってみんな知ってるのに、素人向けの訓練を受けろって？」

「ステファンはダンスの方も、ステップから学び直した方がいいんじゃないのー？」

エリーゼが茶々を入れると、ステファンの顔が再び赤く染まった。

大聖堂での戦いで傷ついたエリーゼは最近になって、やっと完全に回復した。本来ならエリーゼが回復した後、国王がハイワーズ家の全員を呼んでパーティーを開いてくれるはずだったのだ。けれど、とある伯爵令夫人が国王に話を通して、エリーゼの回復を待たずにステファン個人をパーティーに招待する権利を得た。国王が許可したとなれば断ることもできず、ステファンは渋々招待に応じたのだった。

「ご婦人の足を踏みすぎて、王様のパーティーが無期延期になったんでしょ？」

エリーゼは馬鹿にしたように言ったが、ステファンは挑発に乗らなかつた。

「勇者になれなかつたバカの戯言……」

その言葉を聞いて、エリーゼはうっと詰まった。

エリーゼは前世で、日本の女子高生だった。だが何者かに殺されて、異世界に転生したのだ。

魔法や魔物が実在するこの世界に生まれ変わったということは、勇者に選ばれ活躍する運命にあるのでは？

つい先日までそんな夢を抱いていたエリーゼの胸に、ステファンの言葉が突き刺さる。先代の勇者である母アイリスの後継者に選ばれたのは、エリーゼではなく彼だった。

エリーゼは生まれつきこの世界の言語を理解し、読み書きもできる。魔法を使うために必要な古代語、古代星語、古代魔語も操ることができるのだ。

それにエリーゼは、いくつかの恩恵を持っていた。恩恵とは、精霊から稀に授けられる特殊能力のことだ。しかし、この恩恵が持ち主の人生に悪影響を及ぼすこともあり、そういった恩恵は精霊の呪いと呼ばれ忌み嫌われる。エリーゼの持つ【胃弱】や【美貌に弱い】という恩恵も精霊の呪いの一種であり、エリーゼはこれを解除する方法を探して、時おり迷宮を探索していた。

魔法を使う力も精霊によって封じられていたが、精霊に頼んで使えるようにしてもらった。けれど、偉大な運命はステファンのもので、エリーゼは今もただの一冒険者にすぎない。そしてハーランド王子の妃候補という、望まぬ立場を強いられてもいた。

だが彼女は無理やり気を取り直した。兄をぎゃふんと言わせる手段は、まだ残っている。

「お、王様のパーティーには、外国の大使とかも呼ぶ予定だったみたいだもんねー。自国の貴族で

勇者でもあるステファンがダンスもまともにできないんじゃない、あまりにもかっこ悪いもんねー」

「……勇者になれなかったバカの僻み」

「くっ。……そういえば療養中暇だったから、ステファンの下着に刺繍をしておいたよ」

「は？ どんな刺繍だよ」

「『幼女大好き』って」

「——エリーゼえええッ!!」

ステファンが絶叫した。ただの幼女にしか見えない精霊を連れ回す彼にとっては、笑えない冗談だろう。高笑いしながら逃げ出したエリーゼを、額に青筋を浮かべたステファンが追う。精霊たちもその後について走り、玄関ホールから消えた。

それを見送ったエイブリーは深い溜息を吐き、剣を左手から右手に持ち替えた。そして軽く素振りしてから、右腕に巻かれていた包帯を取り外す。

右腕の尺骨に沿うように、赤い傷跡がうつすらと残っている。悪霊に取り憑かれたステファンにつけられた傷だ。

「精霊魔法で癒されてもなお、こうして痕が残るほどの傷を俺に負わせたんだ。どうにかすれば、あいつは魔法剣の使い手として、かなりいい線まで行くんだろうが——」

遠くからステファンの怒声とエリーゼの笑い声が聞こえ、エイブリーは眉を顰めた。

「あれでどうして人間の代表として選ばれ、魔王を殺す器たりえるのか。まるでわからん」

階段の手すりにかけておいた上着を取り上げ、エイブリーは中央階段を上った。二階の左端に位

置する自室の扉を開く。母アイリスの独断専行によって無理やり替えられたカーテンの赤色が目に痛い。エイブリーは目を瞬かせて、そこから視線を逸らした。

カーテンの花柄の模様はベージュの壁紙と調和しているし、部屋の雰囲気自体は趣味のよい明るいものになっている。だが、ここが今年二十四歳になる長男の部屋であることを、アイリスはすっかり忘れていたらしい。

しかしエイブリーは、異を唱えはしない。母の考えは父アラルドの考えに等しいからだ。父に逆らう気など、全く起きなかった。エイブリーは半魔族であるせいか、人間なら普通経験するはずの、反抗期というものにも覚えがない。

彼は軍靴を探して部屋の中をうろつき、ベッドの下からそれを引っ張り出すと、ベッドにどかりと腰を降ろした。

「アーハザンタス憲兵隊の編成は予想通り滞っているようだし、ミーティ騎士団の補充の件もどうなったのか……それに第三近衛騎士隊副隊長の処分は——」

仕事のことを考えながら軍靴を履き、鎧を身につけ終えると、エイブリーは溜息を吐き、視線を宙に彷徨わせた。

やがて執務机の上から書類の束を取り上げ、紐で括つてから、袋の中に放り込む。そして兜を脇に抱え、その中に袋を詰め込んで、エイブリーは扉を押し開けた。

玄関ホールに戻ると、屋敷に残っている僅か二人の使用人のうちの一人が、掃除用具を片付けていた。

そのひつつめ髪のおメイドは、きびきびした動作で頭を下げる。父アラルドに辞めさせられた使用人たちは皆、カロリーナやエイブリーの美貌に魅了されてハイワーズ家にやってきたが、このメイドは違った。前の屋敷で女主人の采配さいはいに口を出しすぎたことで嫌われ、働き口を探していた時、この屋敷を偶然見つけたという。

彼女が雇むとわれたのはエイブリーが生まれる前のことなので、その経緯を詳しくは知らないが、ハイワーズ家で最も古参の使用人だった。以前の屋敷での経験を踏まえてか、ハイワーズ家の人々がどんなに異常な振る舞いをして、口出しすることは無い。

そんなおメイドに、エイブリーは静かな声で命じる。

「母上に伝える。物を買うなどは言わないが、せめて買ったものの明細書だけはとっておいてくれと。俺がこんなことを言ったら、父上がお怒りになるかもしれない。だが母上が欲しい物を買うのに必要な金銭を工面するためだと言えば、父上もご理解くださるだろう。それと、母上がこれまでに接触した商人の名前をリストにしてくれ。これから先、母上も外へ出ることが多くなるだろうから、ドレスを新調する必要がある。ドレスメーカーを呼んで、母上の採寸をさせる。ついでにカロリーナ姉上とエリーゼのものな。母上のドレスについては、母上の希望を最大限叶える形にするんだ。その代わり、姉上とエリーゼのドレスはツーシーズンは流行遅れでもよいから、安く上げるように」

「差し出がましいことかと存じますが」

「なんだ？」

「お早く、執事を雇い入れるべきではないかと」

それだけ言うと、おメイドは一礼して足音も立てずに後ずさりし、エイブリーの視界から消えた。皺しわの寄った眉間みげんを揉みほぐしながら、エイブリーは呟つぶやく。

「確かにこんなことは執事がやるべきで、俺の仕事ではないだろう。だが貧しい貴族の家では、長男が家のことを取りしきるのが普通だというし——」

「うちって貧乏なの？」

考え込んでいたエイブリーの背後から、エリーゼが現れた。どうやらステファンを撒まいて、ここに戻ってきたらしい。エリーゼは玄関ホールをきよろきよろ見回し、首を傾げた。

「お兄様、誰としゃべってたの？ それとも独り言？ 頭大丈夫？」

その言葉について、エイブリーは考察する。これは額面通りに受け取るべきかと。エリーゼのこれまでの行状に照らし合わせて考えるに、心配されているわけではないだろう。恐らくバカにしているのだ。そう結論つけると、エイブリーはエリーゼに掌てのひらを向けて、静かに威嚇いかくした。

「どうやらステファンから逃げお世話しようだが、お前をとっ捕まえて、あいつに引き渡してやつてもいいんだぞ？」

「ごめんなさい」

エリーゼは素早く謝った。やはりエイブリーをバカにしていたらしい。だからといって、別に怒りは湧いてこない。だからそのまま玄関を出たのだが、エリーゼが後ろからついてきたので、エイブリーは眉根を寄せた。

「リールに外出を許可されたのか？」

「なんでリールに断らなきゃなんないの。一応手紙を書いて、リールの部屋に置いてきたけど」

エリーゼは気楽な調子で言ったが、エイブリーにはそれでいいとは思えなかった。彼は怒りとも困惑ともつかない奇妙な感情を覚えて、顔を顰める。

「またリールがうるさくなるから、やめておけ」

「春追い祭りにも参加できなかつたし、もうこれ以上、引きこもってるのは耐えられない！」

春追い祭りとは、毎年この季節に開かれる祭りだ。勇者誕生のこともあり、今年は例年より多種多様な祝い酒が振る舞われたと聞く。幻想魔法が夜空に輝き、平民が焚く篝火で、地上も明るく照らされた。兎を焼く火の周りで、人々は夜を徹して踊っていたらしい。羨ましそうに言うエリーゼも、もし参加していたら止められるまで飽きずに踊り続けていただろう。

エイブリーの同僚の騎士たちの中にも、祭りの騒ぎに羨望の眼差しを向けていた者がたくさんいた。彼らは仕事があつたため、参加できなかつたのだ。エイブリーには、どうして参加したいのか全くわからなかつたが。

「手間をかけさせるな。俺は忙しいんだ。お前が外出したと知って荒れるリールを、宥めている暇はない」

玄関から一緒に出てきてしまったエリーゼに、エイブリーは言外に戻れと命じた。

しかし彼女は最後の手段とばかりに、懐から紙の束を取り出した。それを無感動に見つめるエイブリーに、エリーゼは端的に言う。

「王子様からの呼び出しの手紙」

エリーゼが手にしている手紙は、一通や二通ではなかつた。エイブリーは目を睜る。

「まさか呼び出しがあつたにもかかわらず、応じなかつたのか？ 臥せていた時ならばともかく、床から出てずいぶん経つだろう」

「だって、リールがまだ出るなって——」

「バカめ！ 相手は殿下なのだぞ。ついさつきも屋敷を走り回っていたくせに！ 庭でも阿呆のように転げ回っていたから、塀の外にいるやつらに覗かれていたかもしれないぞ。殿下への詫び状は俺が用意しておくから、さっさと支度しろ」

「そんなのいらぬよ。だって、タイターリスだよ？」

「気安く名を呼べる仲だから、軽んじていいとも言うつもりか？ 将来の国王陛下を？ そうでなくとも、お前の夫になるかもしれないお方だぞ」

エリーゼは酔を呑んだような顔をした。だが、すぐに気を取り直して言う。

「迷宮で寝食を共にしたパーティの一員だから、気心は知れてることだよ。……まあ、だからこそ元気になったことを知らせたいんだよね。心配してくれてるみたいだから」

「手紙には回復したら、後宮に顔を見せに来いとも？」

「そんな感じ。というわけで、後宮に連れて行ってください」

「ああ。一人でのお出を控えるだけの分別はあるんだな」

「……リールの毒舌って、お兄様のせいだと思う」

膨れるエリーゼを軽くあしらうと、エイブリーは素早い足どりで、屋敷の南側に回り込んだ。エリーゼはその後を、小走りですついでくる。

周囲には、厩舎や鶏小屋がまばらに建っていた。鶏小屋の周りにめぐらされた柵の中で、雌鶏が呑気に鳴いている。エリーゼは時おりここから鶏の卵を失敬しているようだった。

「今は誰がお世話してるの？」

「幸運にも、今回の騒動で屋敷を去らなかつた使用人のうちの一人が厩番だ。今は家畜の世話だけでなく、庭の簡単な手入れも任せている。あれは馬に乗れない人間を軽蔑しているから、お前など視界にも入れないだろうな。その点、母上はブランクがあるとはいえ、乗馬の腕前はかなりのものだ。あいつはそれを見抜いて愛想良くしている」

「へー」

「お前もあいつに乗馬を習ったらどうだ？ 教えは厳しいが、素直に学べば上達する。ステファンにもそのうち仕込む必要があるだろうな」

「……私はいいや。迷宮に入るのに馬は使えないし」

エリーゼの言葉に目を丸くして、エイブリーが口を開こうとした時、厩舎の扉が内側から開かれた。中から出てきたのは、青い目を爛々と光らせる中肉中背の男性だ。歳の頃は三十代半ばに見える。

どこか目の焦点が合っていないものの、仕事はきびきびとこなしていた。エイブリーが咳払いをすると、潤んだ目でうっとり馬を眺めていた男は、素早く鞍を取りつけた。

現在、ハイワーズ家の使用人はあの老メイドとこの男しかいない。こうした変わり者だからこそ、残っているのだろう。

エイブリーは鞍に近付き、紐の結び目を簡単に確認すると、無言でエリーゼを抱き上げ馬に乗せた。

「高い！ 怖い！」

「静かにしている」

そう言っただけでも馬に乗り、背中にしがみつくエリーゼを気にすることなく拍車をかけた。

「前に進むなら進むって言っつてよ！」

「途中で王立学問所に寄るぞ」

エリーゼの言葉を無視して、エイブリーは行き先を告げた。するとエリーゼはエイブリーにしがみついたまま首を傾げる。

「本でも借りるの？ 本ならお父様がいっぱい持つてるのに」

「許可を得て書棚の本棚を拝見したが、俺が探している類の本はなかった」

「どんな本を探してるの？」

「魔族の生態について書かれた本だ」

父アラルドは魔族だ。母アイリスは人間だが、長女カロリーナも完全な魔族である。親に限らず先祖に魔族がいれば、魔族か半魔族として生まれることがあるという。

エイブリーは半魔族で、まだ種族が判明していないルールも、魔族か半魔族である可能性が高

かった。しかし、自分がそうだからといって、魔族とはこういうものだと思われつき理解できてい
るわけではない。それは人間だつて同じだろう。

やがて門扉の傍まで来ると、エイブリーは馬を降りる。錠の下りていない門扉の前には人ばかり
ができていて、そこから黄色い声があがった。

エイブリーが門扉を開けて馬を引き出した途端、黄色い声に不満げな声が交じる。馬上にいるエ
リーゼを、エイブリーの恋人だとも思つたのだろう。エリーゼは女性たちの嫉妬の視線に戸惑い、
ひととき強い視線を向けてくる女性に愛想笑いをしてみせた。

「……妹でーす」

それを聞いて、女性たちはエリーゼとエイブリーの髪色が似ていることを確かめると、息を吹き
返したように再び黄色い声をあげた。

エイブリーは強い語気で、けれど丁寧な口調で声を張り上げる。

「道を開けてくれ。急いでいる」

すると物見の群衆はすぐさま、馬車でも通れそうなほど道を広く開けた。だが足どりのおぼつか
ない老人が一人、素早い行動をとり損ねた。それを見たエイブリーは老人に手を貸し、道の脇へ連
れて行く。

その様を見て気持ちが昂ぶつたのか、エイブリーと同じ年頃の女性が馬の前に躍り出たが、彼は
そちらには見向きもしない。そして馬にひらりと飛び乗ると、女性を轆ききそうな勢いで駆け出した。

「……ひつどいなー」

エリーゼの咳きを聞いて、エイブリーが馬の足を緩めた。市街をゆっくりと移動する馬の上で、
彼は興味深げにエリーゼに問う。

「道を妨げた女に対する、俺の行動について言っているんだな？ 同じようなことを、同僚たちに
もよく言われるのだが」

「いつもあんなことしてるの？」

「いけないか？」

不可思議だと言わんばかりに、エイブリーは眉根を寄せる。

「ご老人はともかく、あの女は健脚だろうに、わざと道を塞ごうとしたんだぞ。悪意があるとしたか
思えん。同僚たちは、そういう行動に出る女はむしろ俺に好意があると言うのだが、何度説明され
ても理解できん」

首を傾げるエイブリーを見て呆気にとられた後、エリーゼは苦笑した。

「種族的な感性の違いなのかな。それとも、エイブリーお兄様だけが変なのかな。そういうことを
調べるために本が欲しいの？」

「それもある」

エリーゼはからかい気味に言つたのだが、エイブリーはあつさり認めた。

二人は王の道と呼ばれるメインストリートを王宮のある北方面へ進み、やがて西へ折れた。串焼
き肉の屋台から漂ってくる甘辛いタレの匂いに気を取られ、首を巡らしていたエリーゼに、エイブ
リーは独り言のように打ち明ける。

「本来、魔族は群れを作らないものだ。騎士学校で学んだことがある。しかし、ハイワーズ家は父上のもと統率されている。群れを作るのは、魔王を頂点に据える場合のみだと聞いていたが——」

声は小さかったが、際どい話題だったので、エリーゼは馬上から周囲に視線を走らせた。

「……お父様が魔王？ まさか」

周囲を警戒しつつ、エリーゼはそう返した。勇者の父親が魔王だなんて、物語としては面白いが、現実なら洒落しゃれにならない。

「いや『赤の勇者の物語』から推察するに、父上は『灰色の黒』——つまり魔王を裏切った魔族だろう。だがハイワーズ家に赤の勇者である母上と、その跡を継ぐステファンがいる以上、魔族を敵に回すのは必至だ。現状を正しく理解し、対策を練らねばならない」

『赤の勇者の物語』は実話をもとにして作られたおとぎ話だ。それには灰色の黒と呼ばれる、魔王を裏切った魔族が登場する。

「敵を知り、えーと、自分を知れば、百戦しても危なくない？ つていうことだね」

「お前でも、たまには素晴らしい言葉を口にするものなんだな。どこの偉人の言葉だ？」

「……私がかえたんじゃないって、ソッコーでバレた」

「やはりそうか。だいたい人間性というものは、早々変わらないものだ。若い時分には急激に変化することも珍しくはないそうだし、お前が短期間で成長するのもあり得ないことではないのだろうが、成長したところで本質が変わるわけではないからな」

「よくわからないけど、バカにされてる？」

「バカにしてなどいないぞ」

エイブリーは驚いたような顔でエリーゼを振り返った。そして目を瞬しほかせてから、苦い表情を浮かべて正面に向き直る。

「……確かに、敬意を抱いているわけではない。尊重しようとも思っていないな。以前は恐らく『バカにしている』という表現に見合う認識をお前に持っていたが、今はバカにしているつもりはない。しかしこうして事実を口にしていただけで、似たようなことをよく言われるし、そのせいで問題が起きることもある。騎士団の規律を乱してはまずいから、俺が態度を改善すべきか」

「えっと、本気で悩んでるの？」

「これは悩んでいるというべきか？」

そんなことを聞かれても答えられるはずもなく、エリーゼは口を噤くんだ。そんな彼に構わず、エイブリーは馬の足を速める。

「人間ならばできて当然のことができないのなら改善しなくてはならないと、常々考えている。思うことがあってもなるべく口にしないうようにしているが、それでは根本的な解決にはならない。人間の思惟しゐを忖度そんたくできるようにするべきなのだろう」

「人間にも空気が読めない人ってそれなりにいると思うよ、お兄様」

エリーゼが精一杯発した言葉の意味は、馬が足を速めたせいで揺れがひどいものの、正確にエイブリーに伝わったらしい。

「……そのような言い草を『バカにする』と言うのだと、流石さすがの俺にもわかるぞ。馬から振り落と

されたいのか？」

「ごめんさい」

「そうか。人間たちの間では罪悪感の有無にかかわらず、すぐに謝れば一応の収まりはつくのか」
背に強くしがみつくとエリーゼを放置して、エイブリーは思考の海に沈んだ。

しばらく行くと、精霊神教会のある広場に着いた。王立学問所はこの広場の、ちょうど精霊神教会とは正反対に位置している。

エリーゼは精霊神教会の白い壁を見た。アスピルという精霊を神と崇めるこの宗教団体は、人間以外の種族を悪魔と見なして弾圧している。人間以外の家族を持つエリーゼとは、相容れない思想だ。

あの建物の中に、先日エリーゼたちを死の間際まで追いつめ、苦しめた聖女シルフロネはいない。彼女は精霊神教会の上位機関に連れて行かれたと聞いた。勇者を殺そうとした罪で罰せられるそうだ。彼女に殺されたエリーゼとしては、できれば厳罰に処して欲しいと願うばかりだった。王立学問所の方は、精霊神教会の白く洗練された佇まいとは違い、いびつな形をしている。研究する学問の分野が増えたり、あるいは統合されたりすることに、増改築を繰り返しているからだ。大小様々な大きさの四角い箱をいくつも連ねたような色とりどりの建物が並ぶ。そんな中、唯一広場に面している煉瓦造りの建物へと、エイブリーは馬を進めた。

その門柱には、二本の旗が立てられている。

一本はアールジス王国の国旗で、もう一本はジルクリスタ学術学問同盟の旗だ。エリーゼはジル

クリスタ学術学問同盟が掲げる標語を思い出して暗唱した。

「えっと。学問に国境はなく、あらゆる知識は共有されるべきであり、あらゆる謎は協力して解明せねばならないとかなんとか」

エイブリーは馬から降りると、ぶつぶつと呟くエリーゼを降ろした。そして見張りのいない門扉を開けて中に入る。雑草だらけで閑散とした庭の手前にある厩舎に馬を預けると、エイブリーは口を開いた。

「エリーゼ、学問に役立ちそうな恩恵を持つてるか？　そうでないなら、お前は中へ入れないぞ」

「お兄様は何か持つてるの？」

「持っているわけがないだろう」

エイブリーは呆れた顔でエリーゼを見下ろした。

「お前はもう俺の種族を忘れたのか？　俺は騎士だから中に入ることができるんだ」

恩恵というものは、基本的に人間にしか与えられない。半魔族のエイブリーが持っているはずはなかった。

エリーゼは頷くと、懐からギルドカードを取り出し情報を展開した。ギルドカードとは、冒険者ギルドや商業ギルドなどに加入する際に作ることができる、身分証明書のようなものだ。

彼女は冒険者ギルドに所属している。冒険者ギルドのカード情報を展開すると、自分が持つ精霊の恩恵を参照することができるのだ。

実は大聖堂での戦いの後、エリーゼのカードには新たな情報が追加された。ベッドに縛り付けら

れるようにして過ごしていた間に、穴が開きそうなほど眺めていたが、それ以上の新しい変化はなかった。

「学問に役立つような恩恵はない、かな」

「お前は胃が弱いだけでなく、美貌にも弱いのだったな。阿呆のように思われるから、できるだけ隠しておけ。いくら精霊の恩恵とはいえ、ハイワーズ家の恥になる。開示するのは冒険者ギルドでパーティを組む時だけにしろ」

あつさりとそう言い、建物の入り口に向かうエイブリーを、エリーゼは早足で追いかけて聞いた。

「冒険者を続けてもいいんだ？」

「ハーカラント殿下が冒険者だからな。普通の貴族の令嬢は、迷宮などに潜りたがらん。勇者の妹であることを除けば、冒険者であることがお前の唯一の長所だろう。冒険者を続けて、せいぜい殿下の気を引くがいい」

「……そうしてハイワーズ家を王家に売り込んで、守り立てるってことか。お兄様って本当にハイワーズ家第一だよな」

エリーゼはうんざりした顔で言った。

エイブリーに言われた通り受付で止められたエリーゼは、エイブリーが戻ってくるまで玄関脇の待合室で待つことにした。

待合室には、古い本の匂いが充満している。エリーゼはその匂いを嗅ぐと、不思議な郷愁を覚えた。

(図書館の匂い……)

アラルドの書齋にもたくさん本があるが、こんな匂いはしない。

けれど、どこの世界でも、古びた本は同じ香りがするらしい。

(少し黴っぽいような、なんだか湿った匂い。図書館の奥とか、そんな感じの——)

エリーゼは奥へ続く道にふらふらと近づいたが、中に入ることはできない。すぐ傍で受付の人が見張っているし、柵があって、鍵までかかっている。

やがてエイブリーが本を抱えて出てくると、エリーゼは呟くように言った。

「お兄様、いいな。私も中に入りたい」

「本を借りたいのか？ 言っておくがな」

エイブリーは項垂れ、重苦しい溜息を吐いた。

「本を借りるにも銀貨数枚分の金がかかるんだぞ、エリーゼ」

この世界には金貨、白銀貨、銀貨、銅貨といった貨幣がある。最も価値が低い銅貨は、日本で言えば千円くらいだ。銀貨一枚は銅貨五十枚に等しいので、およそ五万円。つまりここで本を借りるには、何万円、いや何十万円のお金がかかるということだ。

そこでふと、エリーゼは考える。それだけのお金を払える経済力がある人なら、中に入れてもらえるのではないかと。受付の人と交渉してみようかとエリーゼが迷っていると、エイブリーにぎろ

りと睨まれた。

唇を尖らせるエリーゼを見て、彼は低い声で八つ当たりのように言った。

「今うちには、余分な金は一切ないんだ。こんなことを言いたくはないが、父上や母上の金銭感覚はおかしい。後宮に行ったら緊急の場合以外、帰って来るな。お前にかかる生活費がもつたない」

「私、お金ならかなり持つてるから、必要な額を言ってくれば、家にお金入れるけど」

「冒険者ギルドのクエスト報酬か？ そんなもの、なんの足しにもならん。お前の好きに使い。自分磨きにでも、後宮内での版図を広げるための根回しにでも使っんだな」

エリーゼはすたすた歩いていくエイブリーを、必死で追いかける。

図書館——もとい王立学問所に後ろ髪を引かれたが、諦めることにした。今はお金を持ってきていないし、前世を懐かしむ以外に用もない。

厩舎に戻り再び馬に乗せられたところで、エリーゼは再びギルドカードを取り出し、情報を展開させた。そこに表示されている所持金の額に軽い眩暈を覚え、小さく呻く。

「額を見ただけで眩暈がするくらいのお金は、精霊バンクに入ってるよ……」

「お前がどうやって稼いだと言っただけ……いや、そういうえばお前は古代語を話せるのだったか？ 昨今巷に飛び交うバカげた噂によれば、お前は古代星語を自在に操り精霊魔法を駆使する、稀代の賢者だというのが……まさか、古代星語の翻訳の仕事でもしたのか？ お前は生まれつき言語能力だけは発達しているようだからな」

「そういうお金の稼ぎ方もあるんだ」

へえ、と感心してから、エリーゼは肩を落とした。

「噂はデマじゃないよ。賢者かどうかはわからないけど、精霊魔法が使えたよ私。一瞬だけだけ」

「一瞬？」

「……精霊魔法は、ステファンの精霊に封印された」

エリーゼは舌打ちした。彼女の話を耳を傾けるためか、エイブリーが速度を少し落とす。親と一緒に歩く小さな子供が視界に入ると、エリーゼは精霊幼女たちを思い出し、理不尽だと思いつつも睨みつけた。

「生まれてからこれまで、魔法的なものとの接触を一切してこなかったから、いきなり精霊魔法を使えるようになったら危ないとかなんとか。……いや、わかるんだよ？ 単なる精霊の嫌がらせじゃないってことは。精霊魔法を使った時の魔力の消費量は、半端じゃなかったからね。今の私がいきなり強力な魔法を使いまくったら、干からびて死ぬっていうことは感覚でわかっている。魔力込めて一言古代星語を口にするだけで死ぬって言われたし。その言葉自体は疑ってないよ？ だけどさー」

ぶつくさ言うエリーゼの言葉に、エイブリーは眉根を寄せた。

「それはつまり、お前は古代星語を話そうと思えば話せるということか？」

「うん」

頷くエリーゼに目を瞞みはつてから、エイブリーは尋ねる。

「……どこで覚えた」

「わからない」

目を伏せて答えた後、エリーゼはエイブリーの鎧よろいにしがみつき直した。

「誰にも言わない方がいいよね？　なんかこれ、かなりすごいことみたいだし」

「今更気づいたのか？」

「いつの間にか話せてたから、特別なことだなんて思わなかったんだよ」

エリーゼは、言い訳するように言った。エイブリーは怪訝けげんな顔をして続ける。

「翻訳を請け負ったわけでもないのなら、お前はどうやって金を稼いだ？　金額はどれほどだ？」

「白銀貨、三十枚くらい」

「——何をした。ちゃんと足が付かないようにしたか？」

「犯罪なんてしてないからね！」

白銀貨一枚は、日本円で二百五十万円くらいの価値がある。

三十枚ともなれば、およそ七千五百万円である。

とはいえ豪商なら一年で稼ぐことのできる金額だし、爵位を持つ貴族には、これくらいの資産を持つている人間も珍しくはない。

「だけど……その、正貨なんだよね」

正貨とは、古くからある貴重な貨幣だ。人間にはできない特殊な製法で作られているらしい。

人間以外の種族は普通、正貨を使用しているという。人間が使う貨幣はこの正貨を模倣して作ったもので、正貨にはその何倍もの価値がある。

「正貨だと!?　犯罪ではないなら何をした」

ついに馬の足を止め、エイブリーはエリーゼを振り返った。愕然がくぜんとした表情で見下ろしてくる彼に、エリーゼは乾いた笑いをしてみせる。

「……トランプって知ってる？」

「昨今、流行はやっているようだ。軍事行動の最中でも簡単に持ち運べるとあって、騎士団の連中もそれを使って賭けに興じているぞ。平民出の騎士と貴族階級の騎士との間を取り持つ橋渡しになっているようだから、禁じてはいないが、借金で首が回らなくなった愚か者がいた。ゆえに俺の隊では禁止するべきかと悩んでいる」

そこまで言った後、エイブリーはエリーゼを凝視した。

「まさか、お前が開発者なのか？」

「うん。特許とったらこんなことに」

「……それほどの金がありながら使わなかったのは、精霊絡みか？」

「そう。精霊が私の行動を制限したとかで、大聖堂には入れないしお金は使えないしで、大変だったよ。けど、今回のどさくさの中で色々あって、最終的にその制限は解かれたんだ」

「よくわからないが……まあいい。それほど余裕があるというのなら、いくらか貸してくれ」

「貸す？」

自分がお金を持っているという事実をエイブリーが知れば、当然のように没収されるだろうと思っただけに、エリーゼは驚いて目を丸くした。エイブリーは彼女の驚きの理由を誤解したらしく、なぜお金が必要なのかを話し始める。

「屋敷を管理するのに人手が足りないんだ。だが人を雇うには金がかかる。俺たちに魅了された使用人は、父上によって全員解雇されてしまったからな。ああいう人間は探そうと思うとなかなか見つからないし、美貌でない母上に対して礼を失するだろう。もはや普通のやり方で雇用するしかないのだ」

「家のために使うなら、別に返してくれなくていいよ」

「いくらお前が稼ぎ頭だとはいえ、それで全てを賄おうとするなど、ハイワーズ家の、そして騎士である俺の沽券こけんに関わる。そもそも女であるお前が金を稼いでいるなどと、決して口外してはならないぞ。もはや姉上のご事情は仕方がないが、お前は後宮女官をやっているのだ。貴族としての体裁を気にしろ」

エイブリーはエリーゼのお金に手を付けることに抵抗がある様子だった。よその人にバレなければ問題ないだろうにと、エリーゼは不思議に思う。

「私にはお金の使い道が思いつかないし、有効活用してもらえないのなら、お兄様に預けるよ?」

エリーゼの申し出に、驚くほどの謙虚さをもってエイブリーは答えた。

「正貨だと言うのなら、とりあえず銀貨を五枚頼む」

「それだけでいいの?」

「万が一、父上から手持ちの金品を全て渡せと命じられたら、俺は抗あらがえない」

「わかった。ドブに捨てるぐらいなら私がつてる」

「父上をドブ扱いするな」

咎とがめるように言いつつも、エイブリーの表情には苦笑が浮かんでいた。一家の生活費を躊躇ためらいなく無駄遣いするアラルドに全財産を渡してしまうのは愚かな行為だと、彼も頭ではわかっているらしい。

やがて王宮の城門の前で馬を止めると、エイブリーはエリーゼを馬から降ろす。そして王宮を囲む堀にかけられた跳ね橋を、先に渡るよう促した。

「早く行け。殿下をこれ以上お待たせするな」

「お金は今度ね」

ひらひらと手を振るエリーゼに軽く頷いてみせてから、エイブリーは背を向けた。門兵たちに何やら言葉をかけている彼を尻目に、エリーゼは王宮内広場を東から西へ突つ切る。

複雑に張りめぐらされた塀にとりつけられた門をぐり、エイブリーから姿が見えなくなる場所まで来ると、エリーゼは立ち止まった。

「……あれ? さっきお父様をドブつて言っても怒られなかったよね?」

珍しいこともあるものだと思いつながら、エリーゼは首を傾げる。

「お兄様もお金のご苦労して、人間が丸くなったのかな」

そう言った後でエリーゼは呟つぶやく。

「……人間じゃないんだった」

そこでそういえば、と鼻を掻き、鼻の奥に残っていた古い本の香りを嗅ぐ。懐かしくて涙が出そうになるのを堪え、エリーゼは歩き出した。

後宮にあるエリーゼの部屋は後宮の外郭部分にあつて入り口に近く、第一王子の住む王子離宮からは、かなり遠い。上位の女官たちが日々のつれづれを過ごすとこのサロンからも若干遠く、侍女は一人しかいなかった。

だが久々に訪れてみると、エリーゼの部屋は移され、侍女も五人に増えていた。後宮に足を踏み入れるや否や彼女たちに出迎えられ、奥へ案内されたのだ。温室が近く、後宮女官たちの間でも人氣が高いその部屋は、先日までエリーゼに与えられていた部屋の、四倍もの広さを誇っている。

その部屋には、この後宮の主が我がもの顔で居座っていて、エリーゼが部屋に入った瞬間、食いつかればかりに迫ってきた。

「タイタリス・ヘデンと呼んでくれ！」

古代星語で『反逆の狼煙』という意味を持つ言葉、タイタリス・ヘデン。その名を精霊に与えられた彼の本当の名はハーカランドだ。ここアールジス王国の第一王子である彼は、妃候補のエリーゼにとつては、もしかしたら未来の夫となるかもしれない青年だった。

精緻な刺繍が施された絹のチュニックを着て、銀糸のサッシュベルトを締めている。腰に帯びた短剣の柄は金でできていて、ルビーやサファイアである宝石が象嵌されていた。そんな贅をこら

した衣装をなんなく着こなしているタイタリスは、冒険者の服装をしている時とは随分印象が違ふ。

せいぜい彼の気を引けというエイブリーの言葉を思い出して微妙な気分になりながら、エリーゼは適当に言った。

「……たいたいりすへでん」

「違うだろ！」

タイタリスはエリーゼの肩を掴んでガクガク揺さぶった。

「もつとこう、なんかすごかっただろ！ あの時はっ」

「あー、はいはい。わかったから揺さぶるのやめてよね」

十九歳の彼はエリーゼより四つも年上だが、色々あつて彼に対する敬意というものを、エリーゼは持っていなかった。それどころか、親しさゆえの悪ふざけで『殿下』と口にしかけたが、流石にやめておいた。タイタリスは、いかにも切羽詰まった様子だったからだ。

「反逆の狼煙」

「なんか……違わないか？」

「そりゃ、古代語だからね」

「なんで古代魔語で言わないんだ？」

不満そうな顔を傾げ、タイタリスは思いついたように顎に指をかけた。

「いつでもどこでも話せるってわけじゃない、ってことか？」

「そうじゃないけど」

言葉を濁し、エリーゼは部屋の中を見回した。

「……広すぎて落ちつかないなあ」

「落ちつかないから古代魔語が話せないのか!? じゃあ部屋を替えよう、俺からレオンに言ってやる!」

「やめてタイタリス。落ちついて」

「エリーゼちゃん!」

レオンとは誰だろうと思いつながら、エリーゼはタイタリスを宥めようとした。だが彼の勢いに負けて、渋々古代星語を口にする。

〈タイタリス・ヘデン 叛逆の狼煙〉

「……それも、なんか違うくないか?」

「もうこれで許してよ! あのね、ルト語? って言うんだっけ。あれね、精霊の耳元で、わーって大きい声で叫ぶような感じの言葉なの。だからあんまり言いたくないんだよ。言えないことはないけど、気軽に口にするのは憚られるの」

「今のは古代星語か?」

「そうだよ。これじゃだめ?」

「いや、古代星語でも効いてる気がする」

「きいてるって、何?」

「俺の呪いに、効いてる気がする」

そう言いながら、タイタリスは自分の胸に手を置いた。表情を消して虚空を見つめる彼は、ちゃんと王子に見える。貴族らしくない、がっしりとした顎を持ち、肩幅も広いが、この豪華な後宮の一室にあつて違和感がない。

タイタリスはベルベットが張られた長椅子の上に、無造作に腰を下ろした。

こめかみの白い傷跡だけが、部屋の雰囲気とそぐわない。その傷跡を指でなぞりながら、タイタリスは再び口を開いた。

「……精霊の呪いから完全に逃れるには、まだ足りない」

彼が不意に持ち上げた手には、カードが握られていた。その情報を展開すると、彼はカードをエリーゼに放つて寄こす。

タイタリスが精霊神アスピルから与えられた恩恵、【人助け】が表示されている。一見善行を表すように見えるこの恩恵が、彼を苦しめてきた。彼が助けようと思うのは人間だけ。しかしこの世界には、人間以外にも様々な種族が存在している。

タイタリスは【人助け】の効果により、人間以外の種族に尋常ではない殺意を抱いてしまうのだ。

だから彼はこの恩恵を精霊の呪いと呼び、解除するための手掛かりを探していた。その手掛かりが、アスピルではない他の精霊から与えられた、タイタリス・ヘデンという名前だった。

エリーゼの働きにより、この名前が『叛逆の狼煙』という意味を持つことを、タイタリスは知

ることができた。しかしそれを知っただけでは、【人助け】という文字は消えることも薄くなることもなく、今も恩恵の欄に表示されている。

「こんな恩恵頼んでねーよ、って言いたいところだけど、俺の場合は精霊にお願いした結果だからなあ」

タイターリスは苦笑して、こめかみの傷跡を引っ掻いた。

「自業自得なんだよな。だけど俺はもう、耐えられない」

「まあ、頑張つて。ほどほどになら、私も協力してあげるよ」

「ばっか、エリーゼちゃん。ほどほどどころか、全力で協力してもらうに決まってるんだろ？」

タイターリスの言葉に、エリーゼは心底驚いた。

「バカはタイターリスでしょ!? なんで勝手に決めてるの!？」

「エリーゼちゃん、俺が誰だか覚えてるか？」

タイターリスはエリーゼの言葉に少しも動じることなく、へらへらと笑った。

エリーゼは顔を顰める。彼がこの国の王子であり、自分はない下級貴族の次女でしかないことを、思い出したからだ。

「ギルドカードの職業欄を見てみな」

目を細めて言うタイターリス。エリーゼは自分のカードを見て、溜息を吐いた。

「……エディリンスじゃなくなってる」

「だろ？」

ぶつすりとしたエリーゼを見て、タイターリスは楽しげに笑った。

「エリーゼちゃんをできるだけ高い地位に上げるように、レオンに言っただけだよ。エリーゼちゃんちの家格はあんまり高くないけど、父親のアラルド卿は一応爵位持ちだし、兄貴は勇者だから、なんとかなると思っただだよな。なんて書いてある？」

「サフィリディア」

「おお！ 俺の正妃候補じゃん！ 階位で言うところから三番目だぜ」

「わかってるから言わないで」

「なんで嫌そうなんだよ。後宮での権力を保証する高い地位だぞ。俺の呪いを解く手掛かりを示してくれたエリーゼちゃんへの、ご褒美でもあるんだけどな」

傷ついた顔をしてみせるタイターリスに眉を顰めて、エリーゼはソファに腰を下ろす。そして頬杖をつき、一頻り呻いてから、再び口を開いた。

「陰謀渦巻く後宮で、王子様の有力なお妃さま候補になっただなんて、考えるだけで胃が痛い。もし暗殺されそうになったら、他のお妃さま候補に対して何をするかわかんないよ、私は」

「やめとけよ。他の有力候補はこの国の重鎮の縁者ばかりだから、俺でも庇いきれるかわからなうぞ？」

「……迷宮に閉じこもりたい」

「その気持ちはわからなくもないけどな」

タイターリスは乾いた笑いを零した。

「迷宮に潜つてれば、何の罪もない獣人の少女を殺さずに済むだろうから——俺もこもつてたことがあるよ」

「じゃあ、今からでも撤回してよ。ご褒美をくれるっていうなら、他のものが欲しい」

睨みつけるエリーゼの強い視線を受けとめて、タイタリスは目を細めた。

「悪いけど、俺はエリーゼちゃんを手放す気はないよ。たとえ正妃にできなくても、ずっと後宮にいてもらう。サフィリディアってのは、そのための地位だ」

微妙な顔をするエリーゼを見て、タイタリスはへらりと笑った。

「元々この後宮は、俺の精霊の呪いを解くのに役立ちそうな人間を囲い込むために作ったんだ。エリーゼちゃん以外の有力候補は普通に貴族から選ばれた子たちだけど、他の女の子たちは違う。精霊魔法の使い手を輩出した家の娘だったり、精霊に関する伝説が残る村の娘だったりを、国中から身分を問わずにかき集めたんだ。藁にもすがる思いでな。どんなにちっぽけな手掛かりでもいいから見つけるために」

「なんかタイタリスがものすごくひどい人に見える。その中に、婚約者がいる子とかはいなかったの？」

「あー、いたっばいな」

「最低だね」

エリーゼの手厳しい言葉にも、タイタリスは平然と肩を竦めるだけだった。

「別に後宮の出入りは禁じてないだろ？ 恋人と会おうと思えば会えるんだし、万が一恋人と会っ

てる場面を押さえても、罰を与えないようにレインには言つてある。そんなにひどいことじゃないはずだ」

「だけど、異性と触れ合えないんでしょ？ この国の守護精霊だかのせいで。極悪非道もいいところだよ」

「そう罵られるのは覚悟の上だよ」

うつすらと笑うタイタリスの目が、鋭く光った。

「どんなことをしてでも、俺はこの呪いを解くと決めた。そのためなら、なんだってやってやる。国中の女の子を後宮に集めて閉じこめることぐらい、なんでもない」

「……気持ちは、わかるよ」

呟くように言うと、エリーゼは目を伏せた。

そしてギルドカードを手で弄びながら、情報を展開する。タイタリスには見えないように念じたため、エリーゼだけに見えるその内容を確かめた。

名前……エリーゼ・アラルド・ハイワーズ

性別……女

年齢……15歳

職業……冒険者 サフィリディア

種族……人間

所持金……白銀貨29枚 銀貨35枚 銅貨21枚

ギフト
恩恵……【氣配察知】C 【逃げ足】D 【警告】B 【美貌に弱い】【胃弱】【勇者の妹】
加護……松???の靈魂

▼精霊クエスト

視線はまず所持金に向かう。大金すぎてまた眩暈めまいがした。次に、新しく増えた恩恵ギフトを見る。【勇者の妹】というのがどんな恩恵ギフトなのか、よくわからない。そして最後に、加護のところを見た。四つあったハテナマークが一つだけ開かれ、読めるようになっていた。

(にほんご……だ)

久しぶりに見るその文字に感動したのは、一週間前のことだ。エリーゼはあらゆる文字を生まれつき読み解くことができたが、前の世界の文字は忘れかけていたらしい。明らかにされた『松』という文字を見た時、しばらくは文字ではなく絵にしか見えなかった。

「……わかるよ、タイタリス。少しでも可能性があるのなら、あらゆる手段を尽くしたいし、そうせずにはいられないよね」

靈魂という文字を注視しながら、エリーゼは喉にこみ上げる苦いものを呑み下した。

(松????つていうのは、きっと前世の私の名前で——)

魂のどこかで覚えている名前。

(靈魂、か)

あの少女が死んだことを、エリーゼは疑っていないつもりだった。前世の彼女が死んだから今のエリーゼがある。そう当たり前前に考えていたはずなのに、その事実を突きつけられると、もう決して戻れないのだと言われているようで、目の前が暗くなる。

(……加護って何なんだろう)

エリーゼは別のことに思考を巡らせた。それはいつも胸に浮かぶ疑問だった。

(私があの子の来世なら、あの子の魂は今私の中に入っていて、私を加護するものじゃないはずなのに)

何度見ても飽きることはない『松』という文字だけを展開させて、エリーゼはまじまじと眺めた。

「き……はむ? ……キハム……? あれ……なんか違う気が……」

「エリーゼちゃん?」

きよとんとしているタイタリスに気づいて、エリーゼはギルドカードを袋の中にしまった。

「タイタリスと交渉して、後宮の危ない地位から下るしてもらうのが目的だったんだけど、無理そうだから諦めるよ」

「ああ。それが賢明だと思うよ」

「粘ったつてどうせ無駄だもん。タイタリスが権力にものを言わせたら、私に逆らう術すべなんてないし。本気で逆らうつもりなら、国外脱出も視野に入れなきゃね」

「ごめん。謝るから国外脱出はやめてくれ」

「謝られても困るよ。私はこれ以上危ない目に遭いたくないっていうのに」

「俺が守るよ」

タイタリスの言葉に、エリーゼはぶつすりとして言う。

「結局、聖女の足止めすらできなかつたくせに」

「本当にごめん、エリーゼちゃん」

エリーゼは苛立ち紛れに失礼なことを言ったが、タイタリスは怒りもせず真摯に謝った。

「大聖堂での出来事についての調査書を読んだよ。俺が役に立たなかつたせいで、たくさん辛い思いをしたんだな」

本当にごめん、と悲痛な顔でタイタリスは言った。

大聖堂でエリーゼたちが死にかけていた時、彼は気絶していたという——聖女シルフローネに殴られて。目を覚ましたのは、全てが終わった後だつたそうだ。

タイタリスの指が、躊躇いもなくエリーゼに向かって伸びてきた。その指の背でエリーゼの髪を撫でる仕草は優美だつた。

そのまま髪を絡め取るうとしたタイタリスの手を、エリーゼが払いのけた時、扉が叩かれた。扉の向こうから聞こえたのは、少女の高い声だつた。若干震えた声で、振り絞るように用件を告げる。

「ご歓談中のところ、大変失礼いたします。ハーカラント様に、近衛騎士団第二近衛騎士隊副隊長フルーバ様が、使者としていらしております。控えの間でお待ちです」

陛下が呼んでるつてことだな。自分より身分が上の人に呼ばれたら、断れないのが王宮つてこと

ろなわけよ、エリーゼちゃん」

首を傾げたエリーゼに、タイタリスは軽く言つて立ち上がった。

「タイタリスを呼び出せるほど偉い人は、王様しかいないつてことか」

「そゆこと。それ以外のやつが匿名で俺を呼び立てるとか、無理だから」

「えっらそ〜」

「偉そうじゃなくて偉いんだよ、ここでは」

タイタリスは苦笑しながら言う。

「これからエリーゼちゃんの周りでも、貴族連中がうるさくなると思う。既に俺の正妃候補になつてるから縁談を申し込まれたりはしないだろうけど、エリーゼちゃんの歎心を得るために、あの手この手を使つてくるはずだ。惚れさせようとするやつもいるだろうし、強引な手を使つてくるやつもいるだろう。困つた時には俺を呼んでいいからな」

「自分じゃ対処しきれないと思つたらすぐ呼ぶから、タイタリスもすぐ来てね」

「おう。エリーゼちゃんが後宮にいる時は、なるべく王子離宮にいるようにするよ。予定はレーンに伝えておいてくれ」

「さつきから何度か出てくる名前だけど、レーンつて女官長さんのこと？」

意外なことを聞かれたというように目を見開くと、タイタリスは頷いた。

「エリーゼちゃんは後宮のことや王宮のしきたちについて、少し勉強した方がいいな」

「王宮にも後宮にも全然興味ないから、私が困るようなことがあつたら全部タイタリスがなんと

かしてよ」

エリーゼが言い放った言葉に、タイタリスは目を丸くした。だが、やがてへらりと破顔する。

「……なるほどな。確かに、無理やりここに縛りつけてんのは俺なんだし、俺がどうにかするべきだな。他の子なら最終的には唯々諾々いざなぐと従ってくれるもんだけど、エリーゼちゃんの場合は本気で出国を考えそうだし」

そう言ったら困るのは俺だよなあ、と呟くつぶやタイタリスを、エリーゼは睨めつけた。

「これだから貴族っていうのは嫌なんだよね。当たり前のように従うとか従わないとか」

「あー、エリーゼちゃん。自分の身分忘れてる？」

「うっわ、私も貴族だった」

タイタリスは、笑いながら部屋を後にした。その背を見送ると、エリーゼは軽く溜息を吐く。

そして華美な部屋を眺め直し、椅子に深く腰かけた。

「……お兄様とは違って、心が広いなあ、タイタリスは」

そう独りごちて、エリーゼは手元を見下ろした。左手に持っている自分のギルドカードと、右手に持っているタイタリスのギルドカードを見比べる。そのままぼうつとしていたが、やがてハッと目を見開いた。

「えっ、なんで私がタイタリスのカード持ってんの？」

エリーゼ以外誰もいない部屋に、その声が大きく響く。無意味に部屋を見直し、タイタリスの

姿がないのを改めて確認すると、エリーゼは頭を抱えた。

「……こんな大事なものを、置いていかないでよ」

ギルドカードを紛失した場合、再発行するには白銀貨一枚が必要だ。つまり日本円にして、おおよそ二百五十万円かかることになる。駆け出しの冒険者には手も足も出ない金額だった。

「まあ、タイタリスなら払えるだろうけど」

エリーゼは深く腰掛けていた椅子から立ち上がり、扉へ向かった。

そしてエディリンスだった時から仕えてくれていた侍女に一言かけてから出かけようと、控えの間にいるだろう彼女の名前を呼ぶ。

「シーザ、私これから殿下を探しに——」

行ってくるから、という言葉は口から出てこなかった。扉を開いた瞬間、食器棚が崩れるような音が聞こえてきたからだ。硝子ガラスが割れる音が、けたたましく響く。エリーゼは急いで音のもとへ向かった。

音の発生源は控えの間だったようで、そこにはシーザ以外の侍女たちが勢ぞろいしていた。音の原因らしいものは見当たらない。しかし、侍女たちの足下に何かの破片が落ちていた。

「今の音、どうしたんですか？」

「お耳汚し、大変申し訳ございません。何も問題ありませんわ」

やんわりと言ったのは、ひと際背が高く、侍女たちの中では一番年高としかの女性だった。紫紺しんこんの流れのような長髪が印象的だ。赤い紅べにが引かれた唇から出る優しげな声で、彼女はエリーゼを促した。

「どうぞお部屋にお戻りになり、殿下をお待ちになつてください。今日のエリーゼ様のご予定は、全て殿下がお取りになつていらつしやるのですよ」

長い袖からほんの少し指を覗かせ、エリーゼの肩を軽く押す仕草は優美だった。無理やり押されているとは感じないのに、エリーゼはあつという間に部屋に戻される。

「わたくしはフィーリと申します。殿下に愛されておいでですね。エリーゼ様の侍女として、誇らしいですわ」

「いえ、あの。私、このまま後宮にいるつもりは——」

「殿下とのお約束を、すっぱかすおつもりなのですか？」

フィーリは悲しげに眉尻を下げた。自分に罪悪感を抱かせようとするその巧みな表情を見て、エリーゼは平静さを取り戻す。

(綺麗な人だけど……私の恩恵は反応しないな)

彼女に悪いことをしているのかもしれない。そう思わせられるのに、フィーリの言葉に全面的に従おうとは思えない。フィーリが美貌ならば、【美貌に弱い】という恩恵により、エリーゼは逆らえなくなるはずだった。

「ごめんなさい」

そのエリーゼの言葉に、周りの侍女たちは一瞬眉を擡めた。フィーリの表情だけは、先程と変わっていない。後宮のしきりから逸脱しているエリーゼに対する困惑と、エリーゼのことを思つて口にした言葉を受け入れてもらえない悲しみが、雄弁に表現されていた。

「部屋には戻らない。殿下がギルドカードを忘れていったの。お届けしたいから、行つてくる」

「まあ」

エリーゼが敬語をやめ、ギルドカードを掲げて言うと、フィーリは紺色の目を見開いた。

「それでは、わたくしがお持ちします」

「いや、それは」

エリーゼはフィーリの手が届かないよう、カードを抱え込んだ。すると、フィーリは悲しげに目を伏せる。

しかし、エリーゼはカードを届けることを口実にして、後宮を歩き回ると決めていた。道をできるだけ覚えて、せめて脱出路くらいは確保しておかなくてはならない。誰かに襲われた時、袋小路に追い込まれてしまったら洒落にならないからだ。

平時である今は後宮の警備が手薄で、絶好の探索の機会だった。しかも、タイタリスを探すという最高の口実がある。

タイタリスのギルドカードには、精霊にもらった反逆の狼煙という名前が記されている。本名をハーカラントという彼が、その別名をどれだけたくさんの人間に明かしているのか、エリーゼにはわからない。しかし、わからないからこそ、もし問い詰められてもタイタリスに直接カードを届けたかったと言いつけることができる。だから、絶対にフィーリに渡すわけにはいかない。

「私は行くから」

「エリーゼ様をご不在の時に殿下が戻つていらしたら、どうするのです？」

フィーリはやんわりと言った。しかしどこかねっとり絡みつくように自分を取り囲む彼女たちの姿に、エリーゼは面喰らった。これが前世だったら、エリーゼは彼女たちの言葉に唯々諾々と従っていただろう。「松???’’?’’という女の子は意志の強い友達に、流されるのが好きだったのだ。

けれど、この世界に生まれてみると、引っぱってくれる人などどこにもいなかった。そしてエリーゼは一人で歩き、自分で決めることを覚えた。だから自分たちの意志を押しつけてくる侍女たちの姿は新鮮だった。

「……シーザはどこ?’’」

迷った末に、エリーゼは思い出したように言った。シーザなら、エリーゼをこれほど強くは引き留めない。

「あの子なら私のやり方に慣れてるから、頼みたいことがあるんだけど」

そう口にする、侍女たちの視線がフィーリに集まった。フィーリは儂げに微笑み、目を細める。「あの方に、どのような頼みごとを?’’」

エリーゼはこの後宮での自分の発言力のなさに落胆し、溜息を吐きたくなった。

王子の正妃候補とやらになっても、エリーゼには何の力もない。侍女にすら侮られるほど弱いエリーゼにできることは、駄々をこねることだけだった。

「シーザを呼んで来て。シーザに会いたい。早くして」

「……少しお時間をくださいな」

フィーリは相変わらず優しいげな笑みを浮かべたまま、片手を上げた。

「ねえ、皆さん。シーザさんをお連れして」

「フィーリ様……ですけど」

「エリーゼ様がお待ちだわ。あなたたち二人がお迎えに行つてさしあげて」

フィーリは口答えをした侍女と、小麦色のふわふわした長髪の侍女を指し示す。口答えをした侍女の方は多少不満そうに、もう一人は従順に、部屋を後にした。

「しばしの間ですわ。お待ちください、エリーゼ様。ヘリスティのお茶はいかがですか?’’」

「へりすてい?’’」

「エリーゼ様のお美しい御髪おぐみに似た色のお茶ですの」

どこか小馬鹿にしたような目をした他の二人とは違い、フィーリは柔和な表情を少しも崩さず答えた。

「すつきりとした味わいのお茶ですわ。少し苦味がありますけど、慣れればそれがクセになります。よろしければ、蜜もご用意いたしますわ……そうですね、お茶も蜜も何種類かご用意いたしますので、飲み比べてみませんか? サロンでは姫様たちが、お茶の味で産地を当てる遊びをなさったりするんですよ」

エリーゼがその気になってきていることを察したのか、フィーリは彼女の返事を待たずに他の侍女たちへ指示を出した。

「ヘリスティとアピニャ、ロネスキーニをご用意して。花の蜜も五つ以上はご用意してね」

「かしこまりました、フィーリ様」